

Logical Structures of Superlative Degree Comparative Sentences in Chinese

Yu Fei

Keywords: Chinese, Comparative sentence, Superlative degree sentences, Formal semantics, Sentence meanings, Logical structures.

Abstract

Comparative sentences in Chinese are divided into three types which contain “equal degree sentences”, “superior degree sentences” and “superlative degree sentences”. In this study, based on previous studies, “最- sentences” and “比- sentences” are discussed by the method of formal semantics in order to clarify sentence meanings and logical structures.

中国語における最上級比較構文の研究

北京師範大学文学院博士後（Postdoctoral）

于 飛

要旨 中国語の比較構文は「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類に分かれている。本稿は先行研究を踏まえ、形式意味論のアプローチから、中国語の最上級比較構文の「最」構文」と「最上級比較を表す“比”構文」の文型意味と論理構造について考察を行う。

キーワード：中国語 比較構文 最上級比較構文 形式意味論 文型意味
論理構造

1. 「最上級比較構文」とは何か

最上級比較構文（“极比文”）について、『馬氏文通』は「最上級比較構文とは、比較する対象が二つではなく、より広い範囲において事物を比較し、最高のものを取り出す比較構文である」と定義している（馬建忠 1898：140）。

呂叔湘は「最上級比較は、比較する事物がある性質においてほかの類のすべてに勝る（あるいは及ばない）意を表す」と論じている（呂叔湘 1942：363）。

刘焱は「最上級比較は三者あるいは三者以上の間に行われ、比較主体が比較されるすべての項よりすぐれている比較である」と論じている（刘焱 2004：46）。

つまり、比較主体（X）が比較されるすべての客体よりすぐれている比較構文が「最上級比較構文」である。たとえば、

- (1) 北京菜里，烤鸭最好吃。（北京料理において、ペキンダックが一番美味しい。）

↓

ペキンダック（X）がすべての北京料理（比較されるものの範囲）において、最も美味しい（最上級）位置にある。

- (2) 珠穆朗玛峰最高。（チョモランマ山は一番高い。）

↓

チョモランマ山（X）がすべての山（比較されるものの範囲）において、最も高い（最上級）位置にある。

2. 先行研究

2.1 馬建忠（1898）による研究

『馬氏文通』はすでに1でも述べたように、「最上級比較構文とは、比較する対象が二つではなく、より広い範囲において事物を比較し、最高のものを取り出す比較構文である」と定義している（馬建忠 1898：140）。馬建忠 1898 はさらに、この構文を二種類に分けている。

2.1.1 比較される対象が文の中に現れる場合

比較される対象が文の中に現れる場合には、比較主体はこの対象のすべての要素と比較し、最高であると判断する「最」を用いることが多い。た

たとえば、

- (3) 然由居二千石中，最為暴酷驕恣。(由は二千石の中で最も暴虐である。)(『史记・酷吏列傳』)

馬建忠の解釈によれば、“暴酷驕恣”は形容詞であり、つまり比較値である。ここで、“最”を“為”の前に位置づけ、「最上級」の意を表す。また、“由于二千石之中最暴酷驕恣”と言ってもよい。すなわち、比較される対象の中で最上位にあるという意味を表している。従って、比較される対象の後にいつも“中”、“間”などを用いる。(馬建忠 1898: 140 参照)

2.1.2 比較される対象が文の中に現れない場合

比較される対象が文の中に現れない場合は、「広範囲の最上級比較」と言える。つねに、“至”、“極”、“甚”などの文字を用いる。たとえば、

- (4) 泰伯其可謂至德也已。(泰伯はそれ至徳と謂うべきなり¹⁾。)(『论语・泰伯』)

馬建忠の解釈によれば、“至徳”というのは“徳”を最上級に位置づけ、これ以上のものはないという意味である。“徳”は名詞であり、前に“至”をつけて「“徳”を最上位に位置づける」意を表す。この文の中で比較される対象が現れないのは「広範囲の最上級」と言える。(馬建忠 1898: 141 参照)

また、動詞の後ろに“之至”、“之極”などをつけるのはこの類に属している。たとえば、

- (5) 寡助之至，親戚畔之；多助之至，天下順之。(助け寡きの至りは親戚も之に畔き、助け多きの至りは天下も之に順う²⁾。)(『孟子・公孫丑下』)

馬建忠の解釈によれば、“寡助之至”の意味は「“協力する者”が少ないことを最上級に位置づける」ということであり、“多助之至”の意味は

「“協力する者”が多いことを最上位に位置づける」ということである。
 “助”は動詞であり、その後に“之至”をつけると、「最上級」の意を表す。
 (馬建忠 1898：142 参照)

これ以外は、“最”、“至”、“極”などを使わず、“尤”、“益”などを用いても「最上級比較」を表す。たとえば、

- (6) 如水益深，如火益熱。(もし水がますます深く、火がますます熱ければ。)(『孟子・梁惠王章句下』)

馬建忠の解釈によれば、例(6)のように“益”を形容詞の前につけると、いつも「更に、甚だしい(“更甚”)」の意を表す。(馬建忠 1898：143 参照)

この点については、太田辰夫(1987)は異論を持っている³⁾。

さらに、同じ形容詞が文の中に二回現れる場合も「最上級比較」の意を表す。たとえば、

- (7) 戰而百勝，非最之最者也。(戦争はいつも勝利することは善の中の一番の善ではない。)(『漢書・趙充国傳』)

馬建忠の解釈によれば、この文は“非善中之最善者”と言ってもよい。
 (馬建忠 1898：143 参照)

2.2 呂叔湘(1942)による研究

呂叔湘(1942)は「最上級比較は、比較する事物がある性質においてほかの類のすべてに優る(あるいは及ばない)の意を表す」と論じている。
 さらに、最上級比較をその表現方式により「正面的最上級比較」と「反面的最上級比較」に分けている。

2.2.1 正面的最上級比較

「正面的最上級比較」は肯定的面から表し、つねに“最”、“尤(尤其)”、

“较（比較）”などの語彙を用いる。たとえば、

(8) 最后五分钟；最近三百年。（最後の五分間、最近の三百年間。）

(9) 西南山水，惟川蜀最奇。（西南部の山と水において、蜀のが一番特殊である。）（宋濂『送陈庭学序』）

“最”、“尤（尤其）”、“较（比較）”はすべて「ほかのものよりまさる」の意を表すが、内部的意味は多少違いがある。“最”は「純粹的最上級比較」を表し、比較される対象としての「ほかのもの」の性質には言及しない。“尤（尤其）”は比較される対象としての「ほかのもの」の性質がプラスの位置にあると推定している。たとえば、

(10) 流行性感冒是一种传染病，身体不好的人尤其容易传染。（インフルエンザは伝染病であり、体がよくない人はとりわけ伝染しやすい。）

“较（比較）”は比較される対象としての「ほかのもの」の性質がマイナスの位置にあると推定している。たとえば、

(11) 各科之中，数学较难。（すべての科目において、数学は比較的難しい。）

“数学较难”というのは、「ほかの科目は比較的やさしい」の意を表す。“数学尤难”というのは、「ほかの科目はとりわけやさしい」の意を表す。“数学最难”というのは、「ほかの科目はやさしいかどうか」に言及していない。

“尤”の意味は“更”に近く、“较”の意味は“些”と似ている。“较”は現代語の用法であり、“些”は口頭語においての昔の言い方である。“更”と“些”は「一物」と「ほかの物」との比較に用いられる。たとえば、

(12) 各种功课里头，就只算数难些。（すべての宿題において、数学だけ少し難しい。）

- (13) 这得用隔年的雪水，立春前下的更好。(これは去年の雪水を使わなければならない、春分以前のはもっとよい。)

2.2.2 反面的最上級比較

「反面的最上級比較」は「あるものよりまさること」を否定する表現を通して、「最上級」の意味を表す。「正面的最上級比較」よりもっと説得力がある。たとえば、

- (14) 再没有比这一群建筑更调谐更匀称的了。(これらの建物よりもっとふさわしく調和がとれているものはない。)

(15) 治地莫善于“助”，莫不善于“貢”。(地を治むるは助より善きは莫く、貢より善からざるは莫し⁴⁾。)(『孟子・滕文公上』)

2.3 高名凯(1957)による研究

高名凯(1957)は最上級比較を「相対的(比較的)最上級(relative superlative)」と「絶対的最上級(absolute superlative)」に分けている。前者は比較により得る最上級である。たとえば、“最”、“最为”を用いる。

- (16) 伊太太最爱喝中国茶。(伊さんの奥さんは中国のお茶が一番好きだ。)(『二馬』)

後者は量級の絶対的極点を表す。比較により得るものではない。たとえば、古代中国語は“至”、“极”、“绝”、“殊”を用い、口頭語は“太”、“挺”、“非常”、“特别”、“极顶”などを用いる。

- (17) 遇见女子，他的话是特别的多。(女性に会うと、彼の口は達者である。)(『二馬』)

さらに、高名凯は古代中国語における「相対的(比較的)最上級」の文型について以下のように考察している。

- (一) “最”あるいは“最为”を用いる

- (18) 王有孽子不害最长，王弗爱。(王の子供の中に不害は長男であるが、王は彼のことが好きではない。)(『史记・淮南王传』)
- (19) 諸侯咸来宾从，而蚩尤最为暴。(諸侯がみんな従属に来たが、その中には蚩尤が一番凶暴である。)(『史记・五帝纪』)
- (二) 虚詞“至”を用いる
- (20) 陛下承宗廟，当傳子孫于無窮，統業至重。(陛下は祖先の事業を相続し、子孫に続けて伝わるべきだ。天下を統一することが一番重要である。)(『汉书・董贤传』)
- (三) 虚詞“极”を用いる
- (21) 李廣軍极簡易。(李広の軍隊の装備が一番粗末である。)(『史记・李将军传』)
- (四) 虚詞“絶”を用いる
- (22) 謝太傅絶重諸公。(謝太傅の地位がほかの人より一番重要である。)(『世说新语』)
- (五) 虚詞“殊”を用いる
- (23) 良殊大惊。(良はびっくり仰天している。)(『史记・留侯世家』)
- (六) “...为...最”を用いる
- (24) 政成為天下守之最。(政は天下の守備の一番重要な者になった。)(『太原王公神道碑』)

2.4 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫(1987)は最上級比較を「絶対的最上級比較」と「相対的最上級比較」に分けている。さらに、「絶対的な比較で明確なものは最上級比較のみである」と指摘している。

2.4.1 絶対的最上級比較

太田辰夫（1987）は「絶対的最上級比較は副詞を用いて表すが、古今を通じ語順に変化はない」と論じている。さらに、最上級比較構文の用いる比較詞について以下のように説明している。

“最”が古今を通じて用いられ、“頂”は現代語に用いられる。また古代語の“尤”は語気としては最上級とも考えられるが、近世においては、接尾語“其”をとった“尤其”とともに“比”を用いる比較構文にも用いるから、差異比較とみることもできる。

2.4.1.1 “最”の用法

- (25) 吴起与士卒最下者同衣食。（呉起は士卒の最も下の者と衣食を同じくした。）（『史记・吴起列传』）
- (26) 高祖以蕭何功最盛，封為酈侯。（高祖は蕭何の功が最もめざましいので酈侯に封じた。）（『史记・蕭何世家』）

2.4.1.2 “頂”の用法

太田辰夫は「“頂”は元明時代から清代前期の資料では絶無というも過言ではない。おそらく、北方語ではなく、清代後期到北京語に入ったものである」と考察している。

- (27) 星圖甚多，只是難得似圓圖說得頂好。（星図は甚だ多いが、しかし円図が一番うまく説明しているのにまさるものはない。）（『朱子語類』）
- (28) 我们这个船上，有五个孩子，頂好的有两个。（われわれのこの船には五人の少年がおりましたが、一番よいのが、二人おりました。）（『品花宝鑑』）

2.4.1.3 “尤”の用法

太田辰夫は「“最”が純粹の最上級比較であるに対し、“尤”は最上級比較とも考えられるがあるいは強調された差異比較であるかもしれない」と論じている。それは古代中国語では副詞はすべて“于（於）”を用いる比較構文には用いないため、文の構造上から最上級比較と差異比較を決める手がかりが得られず、純粹に意味だけから決めるほかはないことによる。」と論じている（太田辰夫 1987）。たとえば、

- (29) 始大臣诛吕后时，朱虚侯功尤大。（はじめ大臣たちが呂后を誅したとき、朱虚侯の功が一番大きかった。）（『史记・齐悼惠王世家』）
- (30) 倉本好書，無所不觀，無所不通，而尤善律曆。（蒼はもともと本が好きで、読まないものはなく、通じないものはなかったが、とりわけ律曆に詳しかった。）（『史记・張丞相傳』）

2.4.1.4 “尤其”の用法

太田辰夫は「“尤”に接尾語“其”がついてできたものである」と言っている。

- (31) 樹枝上都像水洗過一番的，尤其綠得可愛。（樹の上はみな水で一度洗ったようで、とりわけきれいな緑色をしていた。）（『儒林外史』）
- (32) 再講到你這塊石頭的情節，不但可笑可怜，尤其令人可惱。（さらにあなたのこの石の一件になると、笑うべく憐むべきばかりではなく、とりわけ人を怒らせるのです。）（『儿女英雄傳』）

“尤其”も“比”を用いた比較構文に用いる。ゆえにこれは差異比較というべきである。

- (33) 这河工...比地方官尤其難作。（この黄河工事は……地方官より

もっとやりにくい。) (『儿女英雄传』)

2.4.2 相対的最上級比較

太田辰夫は相対的最上級比較を「限定式」と「非限定式」に分けている。

2.4.2.1 限定式

絶対的最上級比較に副詞的な修飾語が先行するもので、古今を通じ大して問題となる点はない。たとえば、

- (34) 这一班学生里面，老赵最勤快。(この一組の学生中では趙さんが一番まめだ。)
- (35) 諸子中，勝最賢。(息子たちのうちで勝が一番賢い。)(『史记・平原君列传』)

2.4.2.2 非限定式

この言い方は現代中国語特有のもので、古代語にはない。その誕生はきわめて新しく、清代前期からである。たとえば、

- (36) 这凤姑娘年纪儿虽小，行事儿比是人都大呢。(この鳳のお嬢さんは年は若いがすることはだれよりもしっかりしています。)(『红楼梦』)
- (37) 生日比别人都占先。(誕生日がほかの人よりも一番早い。)(『红楼梦』)
- (38) 这是後纂的，比一切的令都難。(これは後になって編纂したもので、どんな令より難しい。)(『红楼梦』)

以上のように、“是人”、“别人”、“一切的令”などひろく一切を指すものを用いているが、疑問代名詞は用いていない。しかし現代中国語では主として疑問代名詞を用い、

(39) 他比谁都聪明。(彼は誰よりも聡明である。)

(40) 这个比哪个都好。(これはどれよりもよい。)

のごとくいう。これは疑問が「任指（一切のものを指す）」に転じやすい（例え：誰→无论誰）ことから用いられるようになったものである。

2.5 刘焱（2004）による研究

刘焱（2004）は「最上級比較は三者あるいは三者以上の間に行われ、比較主体が比較されるすべての項よりすぐれている比較である」と論じている。さらに、最上級比較構文の文型を三種類に分けている。

2.5.1 「X 最 / 顶 R」

(41) 全世界最好的饭菜在中国，中国最好的西餐在香港。（世界中で一番美味しい料理は中国にあり、中国の一番美味しい西洋料理は香港にある。）（张辛欣・桑晔『北京人』）

2.5.2 「连 X 都 / 也 R」

刘焱は「“连...都 / 也...” の文型は基本的情報を表す以外、また“一般的でない”の意味、“最不”の前提情報および“更に”の推定情報⁵⁾を含んでいるから、“最上級比較”の意味類型に入るべきである」と指摘している。

(42) 人家说皇后大饭店，我连皇后大饭店是朝东的，还是朝西的，全都不知道。（「皇后大饭店」といってるものについて、私は「皇后大饭店」の向きさえまったく知らない。）（『老舍文集 1』）

2.5.3 「X 比 Y 还 R」

刘焱は「“X 比 Y 还 R” の文型は一般の“比”構文および“X 比 Y

还₁R”⁶⁾の文型と異なる」と指摘している。「X 比 Y 还₂R」の文型は誇張法を用いている。比較客体“Y”はある範囲においての最も典型的なメンバーを表し、“X”が“Y”を超えて最上級のメンバーになる。従って、「X 比 Y 还₂R」は最上級比較に属するはずである。

- (43) 这物价, 跑得比兔子还快。(この物価は上がるスピードがウサギよりもっと速い。)(『剧本 2000.3』)

3. 最上級比較構文の論理構造と文型意味

中国語における最上級比較構文は古今を通じ語順に変化はほぼない。従来の研究はほぼ意味上から、比較構文の文法構造と字面上の意味について論じている。本研究は先人の研究を踏まえ、松村(2010-2013)の解析方法を借用し、述語論理の方法を導入し、「三項関数」⁷⁾の論理構造から最上級比較構文の内部構成を分析する。

3.1 “最” 構文

最上級を表す“最”構文の構造は「X + 最 + 形容詞」である。

- (44) 諸子中勝最賢。(息子たちのうちで勝が一番賢い。)(『史记・平原君列传』)

この文の論理式は次のようになる。

- (44') $\begin{array}{c} \sim \text{ト} \\ \text{アル} \end{array}$ 最' $\begin{array}{c} \sim \text{ガ} \\ \text{アル} \end{array}$ [勝, 勝以外の諸子⁸⁾, β $\begin{array}{c} \sim \text{ト} \\ \text{アル} \end{array}$ 有' (勝, [賢 1]) & 有' (勝以外の諸子, [賢 2]) γ 1

	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
&有'	{減'}	([賢 1], [賢 2]),	[差数]}	&到'	([差数], 多少))	
アル		～ニ	～ガ		～トイウ状態ニ	
		γ 2			γ 3	

呂叔湘（1942）は“一胜余曰极比”と定義している。この論述で、最上級比較構文の比較主体は“一”（すなわち“個体”）であり、比較客体は“余”（すなわち“個体以外の個体範囲”）である。比較主体と比較客体の間に“胜”（すなわち“差がある”）の関係がある。つまり、“個体”は“個体以外の個体範囲”と“差”があるという意味の文は「最上級比較構文」であると理解できる。

次に、(44')の意味を説明しよう。この文の「息子たちのうちで勝が一番賢い」という命題内容は論理式では「最'〔勝, 勝以外の諸子, 有'（勝, [賢 1]）&有'（勝以外の諸子, [賢 2]）&有' {減'（[賢 1], [賢 2]）, [差数]} &到'（[差数], 多少）}」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有'（勝, [賢 1]）」は「“勝”には [賢 1] がある」の意を、「有'（勝以外の諸子, [賢 2]）」は「“勝以外の諸子”には [賢 2] がある」の意を、「有' {減'（[賢 1], [賢 2]）, [差数]} &到'（[差数], 多少）」は「[賢 1] から [賢 2] を引くと差がある」の意を表す。用例（44）の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1 は「勝」と「勝以外の諸子」が「経験者格」を、「賢 1」と「賢 2」が「属格（対象格）」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3 は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

3.2 最上級比較を表す“比”構文

“比”構文の主な機能は「差異比較」を表すが、以下の二つの文型は

「最上級比較」を表すこともできる。

3.2.1 「X + 比 + Y + 都 + 形容詞」

「最上級比較」を表す「X + 比 + Y + 都 + 形容詞」の中の“Y”は普遍的意味を表す成分に限られ、よく「不確定性」を表す疑問代名詞（“什么”、“谁”、“哪”、“哪儿”など）、広範指示代名詞（“一切”など）および形容詞（“任何”など）を用いる。

(45) 这儿比哪儿都安静。(ここはどこよりも静かです。)

この文の論理式は次のようになる。

(45') $\begin{array}{ccccccc} \sim\text{ト} & & \text{アル} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \text{アル} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} \\ \text{比'} & \text{[这儿, 哪儿, 有' (这儿, [安静 1]) \& 有' (哪儿, [安静 2])} \\ \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ト} & & & & & \\ & \alpha & \beta & & & & \gamma\ 1 & \\ & & & & & & & \\ & & \text{ヒク} & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & \text{ナル} & \sim\text{ガ} & \\ \& \text{有' } \{ \text{減' ([安静 1], [安静 2]), [差数]} \} \& \text{到' ([差数], 多} \\ \text{アル} & & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{トイウ状態ニ} & & \\ & & & \gamma\ 2 & & \gamma\ 3 & & \\ & & \sim\text{ニ} & & & & & \\ & & \text{少)]} & & & & & \end{array}$

ここで、(45')の意味を説明しよう。この文の「ここはどこよりも静かである」という命題内容は論理式では「比' [这儿, 哪儿, 有' (这儿, [安静 1]) & 有' (哪儿, [安静 2]) & 有' {減' ([安静 1], [安静 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。

「有' (这儿, [安静 1])」は「“这儿”には [安静 1] がある」の意を、「有' (哪儿, [安静 2])」は「“哪儿”には [安静 2] がある」の意を、「有' {減' ([安静 1], [安静 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]」は「[安静 1] から [安静 2] を引くと差がある」の意を表す。用例 (76) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma\ 1$ は「这

儿」と「哪儿」が「経験者格」を、「安静1」と「安静2」が「属格（対象格）」を表すので、「格役割」を表示する。 γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文の副話題としての“哪儿（どこ）”は“这儿以外的地方（ここ以外のところ）”の意を表す。言い換えると、例（76）は““ここ”は“ここ以外のところ”と“静かさの差”がある」の意を表す。呂叔湘（1942）の「最上級比較」に対する定義により、「ここが一番静かである」の意を理解することができる。

（44’）の“副話題”とする β 項は“胜以外の诸子”という比較範囲であり、（45’）の“副話題”とする β 項は“这儿以外的地方”という比較範囲である。“ a が a 以外の比較範囲と差がある”構文が“最上級比較”を表すのは意味的に問題がない。従って、例（44）と（45）は“最上級比較構文”である。

3.2.2 「(再也+) 没有+比+ Y +更/还/再 (ADJ +的) +了」

現在まで、「(再也) 没有比」の文型が「最上級比較」を表すことを指摘した研究はあるが、なぜ「最上級比較」を表すのかについて研究した論文はない。ここで、筆者は「(再也) 没有比」の文型の論理構造と意味を説明し、それがなぜ「最上級比較」を表すかについて説明してみたい。

- （46）再也没有比北京烤鸭更好吃的了。（北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない。）

この文の論理式は次のようになる。

(46') $\begin{array}{ccccc} \sim\text{ト} & & & & \text{アル} \\ \text{比}' & \text{[北京烤鸭以外的 (菜), 北京烤鸭, 有' (北京烤鸭以外的} \\ \text{アル} & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ト} & \\ & a & & \beta & \end{array}$

$\begin{array}{cc} \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} \\ \text{(菜), [味道 1]} & \end{array}$

γ 1

$\begin{array}{ccccccc} \text{アル} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \text{ヒク} & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} \\ \&\text{有}' & \text{(北京烤鸭, [味道 2])} & \&\text{有}' & \{\text{減}' & \text{([味道 1], [味道 2])}, \\ & & & \text{アル} & & \sim\text{ニ} \\ & & & & & \gamma 2 \end{array}$

$\begin{array}{c} \text{[差数]} \\ \sim\text{ガ} \end{array}$

$\begin{array}{ccccc} & (\text{ナイ}) \text{アル} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \\ \&\text{到}' & \{\text{[差数], } \neg\text{有}' & \text{([好吃], 多少)}\} & \\ \text{ナル} & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & \\ & & & \sim\text{トイウ状態ニ} & \end{array}$

γ 3

ここで、(46') の意味を説明しよう。この文の「北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない」という命題内容は論理式では「比' [北京烤鸭以外的 (菜), 北京烤鸭, 有' (北京烤鸭以外的 (菜), [味道 1]) & 有' (北京烤鸭, [味道 2]) & 有' {減' ([味道 1], [味道 2]), [差数]} & 到' {[差数], $\neg$ 有' ([好吃], 多少)}]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (北京烤鸭以外的 (菜), [味道 1])」は「“北京烤鸭以外的 (菜)” には [味道 1] がある」の意を、「有' (北京烤鸭, [味道 2])」は「“北京烤鸭” には [味道 2] がある」の意を、「有' {減' ([味道 1], [味道 2]), [差数]} & 到' {[差数], $\neg$ 有' ([好吃], 多少)}]」は「[味道 1] から [味道 2] を引くと差がある (差が [好吃] がいくらかないという程度になる)」の意を表す。「 $\neg$ 」は“有' ([好吃], 多少)”を否定している。

用例 (46) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「北京烤鸭以外の (菜)」と「北京烤鸭」が「経験者格」を、「味道 1」と「味道 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

なぜ例 (46) の論理構造が (46') のようになるのか。その理由は次の通りである。

方立 (2000) は量化詞否定規則について、次のように論じている。

(47) 量化詞否定規則: $\forall x \neg \phi(x) \leftrightarrow \neg \exists x \phi(x)$

例: 大家都不喜欢王五。(すべての人は王五のことが好きでない。)

∴ 没有人喜欢王五。(王五のことを好きな人はいない。)(方立 2000: 197)

ここの“ $\forall$ ”は“普遍量化詞”であり、“すべてのもの (x)”を表す。“ $\exists$ ”は“存在量化詞”であり、“少なくとも一つのもの (x) がある”を表す。

例 (47) を説明すると、“有人喜欢王五”の文は論理式で示すと、次のようになる。

「 $\exists x [人'(x) \ \& \ 喜欢(x, 王五)]$ 」(“至少有一个人喜欢王五 (少なくとも一人は王五のことが好きである”) の式になる。この式を否定すると、前に“没有”をつけて

「 $\neg \exists x [人'(x) \ \& \ 喜欢(x, 王五)]$ 」(“没有人喜欢王五 (王五のことを好きな人はいない”) の式になる。この式は、

「 $\forall x [人'(x) \ \rightarrow \ \neg 喜欢(x, 王五)]$ 」(“大家都不喜欢王五 (すべて

の人は王五のことが好きでない”)の式と等値である。

量化詞否定規則を例(46)に適用すると、

$$(48) \neg \exists x \phi(x) \leftrightarrow \forall x \neg \phi(x)$$

「有比北京烤鸭更好吃的(北京ダックよりもっと美味しいものがある)」という文の形式的な否定は「再也没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」となる。

「再也没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」という文は言い換えると「全都比北京烤鸭不好吃。(すべては北京ダックより美味しくない。)」のようになる。この二つの否定文をよく考えてみると、前者の“存在量化詞”を持つ文に対する否定と後者の“普遍量化詞”を持つ文の“着点”の部分に対する否定は同じである。つまり、「再也没有比北京烤鸭更好吃的了」の文は“全都比北京烤鸭不好吃”と等値であり、“北京ダックが一番美味しい”という「最上級比較」の意味を表している。この“すべて”は“北京ダック以外のすべての料理”と理解できる。

従って、筆者は例(46)の論理構造を(46')のように分析したのである。

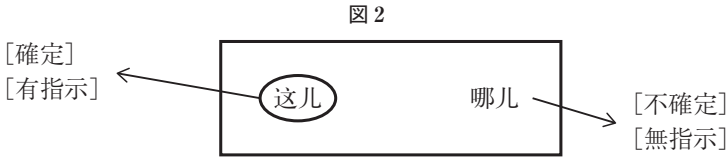
もう一方、“確定性”と“指示性”のあるかどうかから分析すると、次の図になる。

(44) 諸子中勝最賢。

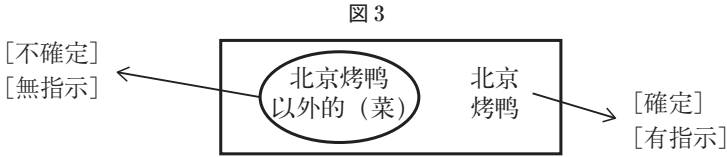
図1



(45) 这儿比哪儿都安静。



(46) 再也没有比北京烤鸭更好吃的了。



論域 (□で表す) には a “胜”、“这儿”、“北京烤鸭以外的 (菜)” (○で表す) と β “胜以外の诸子”、“哪儿”、“北京烤鸭” のみが存在するだけで、(44) (45) では a が β にまさり、(46) では a が β に及ばないので、(44) (45) では a が最上級を (46) では β が最上級を表すことになる。つまり、[確定]、[有指示] の意味特徴を持つものが最上級を表す。

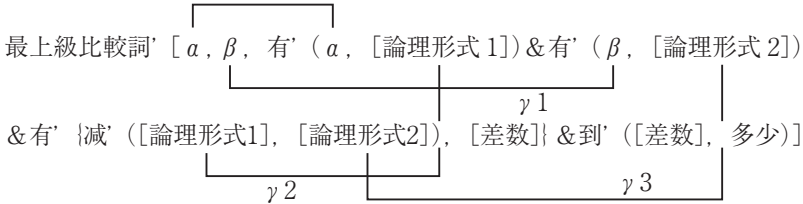
4. まとめ

中国語における「最上級比較構文」についての研究は、「平等比較構文」と「差異比較構文」についての研究に比べ非常に少ない。刘丹青 (2003)、刘焱 (2004)、许国萍 (2007) などの学者は「最上級比較構文」が「差異比較構文」の下位類であると考えている。さらに、许国萍 (2007) は「二つの比較する対象が存在するとき、X 以外のすべての対象あるいは Y 以外のすべての対象を一つの総体と見なせば、このような差異比較構文是最上級比較の意味が表せる。この場合は“差異比較の枠を超えている”とってよい」と論じている。本研究は、「最上級比較構文」の論理構造が

「平等比較構文」と「差異比較構文」の論理構造と多少異なる点があること（ β = “ a 以外のすべて” の構造）から考え、それは独立して別の比較構文になるはずであると考えている。

各文型の用例の分析からみると、最上級比較構文の論理構造は以下のようによまとめることができる。

図 4



この構造の中の a 、 β 、[論理形式 1]、[論理形式 2] は図 4 の通りで、すべて「演繹モデル」に従う。先行する命題の第一項は a に繰り上がり、第二の命題の第一項は β に繰り上がる。この式の比較対象が「確定」していなければ演算ができない。そこで、比較対象の論理形式に添え字の “1” と “2” を付加する。全体からみると、 a 、 β と γ の三項関数の項の論理関係がはっきりしている。

最上級比較構文の典型的比較詞は「最、頂」などである。さらに、「比…都…」と「没有比」の特殊な “比” 構文も最上級比較の意味を表せる。比較する対象の「X」と「Y」の一方は個体対象であり、もう一方は「X」あるいは「Y」以外のすべての対象の集合である。

最上級比較構文の論理式は「最上級比較詞' $[a, \beta, \text{有}' (a, [\text{論理形式 } 1]) \& \text{有}' (\beta, [\text{論理形式 } 2]) \& \text{有}' \{\text{減}' ([\text{論理形式 } 1], [\text{論理形式 } 2]), [\text{差数}]\} \& \text{到}' ([\text{差数}], \text{多少})]$ 」である。この式は「 a が a 以外のすべてと、あるいは β 以外のすべてが β と γ とイウ状態ニアル」の意を、つまり「 a （あるいは β ）が最上級にある」の意を表す。さらに、“ γ ”

の項を“ γ 1”、“ γ 2”、“ γ 3”に下位分類ができる。“ γ 1”は「格役割」を表し、“ γ 2”は減法で差があること、つまり「数量化」を表し、“ γ 3”は差があること、つまり一種の「着点」を表している。これが最上級比較構文の論理構造およびそれが表す意味である。

従来の研究はほぼ意味上から、比較構文の文法構造と字面上の意味について論じている。本研究は述語論理の方法を導入し、「三項関数」の論理構造から比較構文の内部構成を説明した。論理式は、中国語とか日本語に特有の構造ではなく、世界中のすべての自然言語に共通する中間言語であると考ええる。論理式は世界中のすべての言語の文の内部的構造や文成分の結びつきの規則を示しているので、外国語を教えるときにも役立つと考えられる。

注

- 1) 『中国語の古典 1・論語』（藤堂明保訳 昭和六十一年一月）の日本語訳による。
- 2) 『中国語の古典 4・孟子』（大島晃訳 昭和五十八年五月）の日本語訳による。
- 3) 太田辰夫は「漸層は往々にして比較と混同されるが、比較は同一時における二物をくらべるもので、そこに時間的要素をふくまない。漸層は同一物あるいはそれに準ずべきものの異なった時における状態をくらべるものである。それゆえ述語は形容詞とはかぎらず動詞のことも多い。古代語では“益”、“愈”、“弥”などを用いる。」と論じている。（太田辰夫 1987：178-179）
- 4) 『中国語の古典 4・孟子』（大島晃訳 昭和五十八年五月）の日本語訳による。
- 5) 崔希亮（1900）を参照されたい。
- 6) 刘焱（2004）は差異比較を表す文型を「X 比 Y 还_R」と記し、最上級を表す文型を「X 比 Y 还_R」と記している。
- 7) 本稿では「述語論理」を用いて、比較構文の各項の関係を明示する。述語論理においては、文の意味（命題）は「関数（functions）」と「引数（arguments）」からなる「式（form）」によって表される。理論上は、関数の種類はそれが伴う引数の数だけ存在してよいが、自然言語の文の意味表示においては、「一項関数」、「二項関数」、「三項関数」の三種にとどめるのが一般的である。論理構造からみると、比較構文は「三項関数」に属する。具体的表示は「比較詞（ α , β , γ 1 & γ 2 & γ 3）」になる。この α は「比較主体（話題）」であり、 β は「比較客体

(副話題)」であり、 $\gamma 1$ は「格役割」を表し、 $\gamma 2$ は「数量化」を表し、 $\gamma 3$ は「着点」を表す。 $\gamma 1$ 、 $\gamma 2$ と $\gamma 3$ は γ からの拡張と考える。従って、比較構文の論理式は「拡張三項関数」と言ってもよい。

- 8) “胜以外の诸子”の文成分の内部の関係は「“胜以外”という項と“诸子”という項には“的”という“関係”がある」ことであり、論理式は“有(的)’{以外’(胜), 诸子|”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“胜以外の诸子”と記する。ほかの用例も同じである。
- 9) ここの「確定」の意味は文脈の中ではっきりと決まっていることであり、すなわち「既知情報」を表すことである。

参考文献

1. 高名凱 1985 『汉语语法论』 商务印书馆
2. 刘 焱 2004 『现代汉语比较范畴的语义认知基础』 上海学林出版社
—— 2004 「“比”字句对比项选择的语义认知基础」『上海财经大学学报』 2004
3. 吕叔湘 1990 [1942 初稿] 『吕叔湘文集（第一卷）——中国文法要略』 商务印书馆
4. 马建忠 2007 [1898 初稿] 『马氏文通』 商务印书馆
5. 太田辰夫著（蒋绍愚・徐昌华译） 1987 [1958 初稿] 『中国语历史文法』 北京大学出版社
6. 松村文芳 2010-2013 年博士後期課程講義
7. 『中国の古典 1・論語』 藤堂明保訳 昭和六十年 学習研究社
8. 『中国の古典 4・孟子』 大島晃訳 昭和五十八年 学習研究社